ドリー。

EtEt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドリー。

【Ｎコード】
Ｎ９２６７Ｎ

【作者名】
ＥｔＥｔ

【あらすじ】
遺伝子科学立国となった日本が、
癌の完全治癒を確立して７５年後の世界。

同じく７５年前に
死刑制度が廃止され、
憲法第九条が放棄される。
日本は何をしようとしているのか。
日本は何を目指すのか。

７５年前、そして７５年後。（前書き）

この小説には、
実在の機関・団体名等が出てくる場合があります。
ご都合の悪い点などございましたらお知らせ下さい。

75年前、そして75年後。

「スズキさん　良かったですね。あなたは運が良い。」

何のことか分からなかった。

「あなたが事実上、最後の刑死人ってことですよ。」

そうか、俺が最後か。

馬鹿なことをした。今更どうしようもないが。

「何でそんな暗いカオするんです？」

男が笑いながら言った。

殴り飛ばしてやろうかと思った。

「だから言ったじゃないですか。事実上って。」

事実上・・・？

何のことか分からなかった。

タカハシは新聞を広げていた。
新聞の一面には日本の癌完全治療から７５周年を祝う式典が
昨日行われたことを報じている。

「７５周年ねぇ　何で５年刻みでやるんですか？」

返事はない。

「あのー　もしもし？」

急に目の前に女が現れた。
ソファに座っていた彼はのけ反ることが出来ず
ただ背筋が奇妙にのびた。

「いちいちうるさいんですよ。もう少し仕事熱心になりませんか？」

「悪い悪い。」

彼女はヨシダと言った。

一応はタカハシの秘書ということになる。
新聞を取り上げたのは彼女だった。

「先程１４：１５　共民党ヨシハラ派衆議院議員、ナカムラが死にました。」

「いいよそんな長い説明。　ナカムラで分かるよ大体。」

大体という言葉に多少の苛立ちは感じたものの、
ヨシダは続けた。

「恐らく、暗殺かと。」

「ヤな時代だねぇ。」

「先生ッ　ホントにやる気あるんですかぁ？」

「人はすぐ殺されるわ
殺したヤツは死刑にならないわ
昔と変わったのはテレビがメガネなしで３Ｄで見れるぐらいだし。

・・・そんな良い時代じゃないよねぇ。」

「で、何やればいいの？」

ヨシダは困惑していた。
が、すぐにタバコに手を伸ばすタカハシを制止した。

「いてッ　何すんのヨシダ。」

「いてッ　じゃないですよ　何タバコ買ってんですか。」

タカハシの手はまたもタバコに伸びていたが
今度はヨシダは止めなかった。

「いいだろ　一箱ぐらい・・・」

「ダメです。タバコ一箱いくらすると思ってるんですか?」

「いいじゃん　諸経費で落とせば。」

「だから私、政治家って嫌いなんです。」

「あぁ寂しいなぁ　ヨシダにフラれたぁ」

そう言うとタカハシは背広を取った。
議員バッヂは付けっぱなしだった。

「出かけるよ。」

「御気を付けて。」

この会話だけは今までと違い、妙な真剣さが取り巻いていた。

事実上の刑死人。

「あ　何するんだっけ？」

「あなたって人はもう・・・・。」

タカハシの一言で先程の真剣さは意味のないモノになってしまった。

「だから　今日は・・・」

「おっと思い出した。」

タカハシはそう言って頭を掻くとすぐにヨシダに背を向けた。

「じゃ　行ってくる。」

「死ぬのだけは勘弁ですよ。」

タカハシはドアを開けた。

この日本で人一人というのは
本当に取るに足りない。

しかし一部は違う。

その一部が国を動かす。

末端の人間に知る必要の無いことは
数多くある。

日本の癌治療、
死刑制度廃止、
憲法第九条破棄。

これがその一例。

一見関係ない事とも思える。
だが、そうではない。

全ては仕組まれていた。
そう７５年前に。

「スズキさん。あなたには今日からここで暮らしてもらいます。」

何が何だか全く分からなかった。

「ここは・・・？」

「言えません。残念ながら。」

男はまた笑った。
誰から見ても、作った笑顔だった。

「あの・・・一つ聞いて良いですか？」

スズキはこの目的を問おうと思った。
が、口から出てきたのは違う言葉だった。

「お・・・お名前なんて言うんですか？」

「私ですか。ヨコミゾと言います。」

スズキはそのカオに見覚えがあった。

「あの・・・あなたって」

「そうですが。」

男はまたあの嫌な笑顔を見せた。

「法務大臣のヨコミゾです。以後宜しく。」

確かにテレビで見た法務大臣が今目の前にいる。
と同時に、違和感を感じた。

「あなたがこれから目にするのは、国家の最高機密。」

スズキは唾を飲んだ。

「あなたは死刑とは対をなす刑を受けてもらいます。」

「逆・・・って事ですか？」

「スズキさん。あなたには死なないでもらいます。」

ヨコミゾが開けた扉の先には、
無数のベッドが置いてあった。

「この人達は・・・・・？」

「”事実上”の刑死人ですよ。」

消えた４６人。

死刑が廃止される前から、廃止が決まった７５年前までの１０年間で、
死刑執行された人間は全部で４６人。

まぁ”事実上”の話だ。

その４６人。誰一人として火葬されたという報告はなく、
また献体になってもいない。ましてや誰も引き取っていない。

あるのはタダの死亡報告書のみ。

４６人に一体何が・・・

「タカハシ君。」

「ヤマガタさん。お久し振りです。」

「ナカムラ君が死んだ。」

ヤマガタは穏やかな表情だった。
どこか笑っている様でもあった。

「えぇ　聞きました。あまりにも突然で・・・」

「そうだ。突然だ。」

「え？」

「え　じゃないよタカハシ君。キミだろ。」

「すみません、何のことだか・・・」

ヤマガタの表情はさっきのそれとは
うって変わっていた。有無を言わさない目をしていた。

「ついこの間だなぁ。法務のトダ君が死んだのは。」

法務のトダというのは先月暗殺された
トダ法務大臣の事である。

「はい。」

「そんなに大臣になりたいか？」

タカハシは表情を変えなかった。

「さっきから仰っている意味が・・・」

「とぼけるな。」

「殺したのはキミだ。調べもついている。」

タカハシは焦った。
完全に見透かされていた。
が、ヤマガタは思いがけない言葉を口にした。

「いいよ。入りたいなら。今日からタカハシ法務大臣か。」

ヤマガタは一瞬笑ったが。
本当に一瞬でしかなかった。

「”日本”を見せてあげよう。」

あれからどれぐらいたっただろう。
スズキは気付くとベッドに寝かされていた。

「起きたか。」

「ヨコミゾさ・・大臣。」

「あなたは素晴らしい。予想以上です。」

「はぁ。」

やはり何が何だか全く分からなかった。

「早老症というのを知っていますか？」

スズキは違う方の字しか出てこず、
一瞬自分の股間あたりを見た。

「人間のＤＮＡにはテロメアというモノがあります。」

「テロメア？」

「細胞が分裂するのは知っていますか？」

「えぇ　学校で習いました。」

「細胞には分裂の数に制限がかかっているんです。
早い話、テロメアが鍵を握っています。」

スズキはこれから先の話が
理解できるか不安だった。

「その制限に、つまり終わりに近くなっていくのが老化です。」

「はい・・・」

「しかし、老化しない　不死化した細胞があるんです。」

「そんなモノが・・・」

「ふふ　癌細胞ですよ。」

ヒトなどの動物組織から取り出した初代培養細胞は
分裂回数が制限されており、一定数の分裂を行うと
細胞周期が停止してそれ以上は分裂できなくなる。
この現象を細胞老化と呼ぶ。

これに対して、

がん化した細胞などは際限なく分裂することが可能であり、
この形質を細胞の不死化と呼ぶのである。

「私たちは、ガン細胞のテロメアから細胞の不死化に成功したのです。
癌細胞そのものではなく、人工の細胞として。」

「それが・・・どうしたんですか？」

ヨコミゾはあの嫌な笑顔を浮かべながら、
スズキの目と鼻の先ほどの距離までカオを近づけた。

「今、あなたで実験中なんです。」

あと一人。

世間にはタカハシ法務大臣誕生と同時に
自衛隊の解散。第二次大戦以来の日本軍再編のニュースが飛び交っていた。

防衛省は存続するが、内閣総理大臣ヤマガタは
陸軍・空軍・海軍それぞれに大臣一人を置いた。

既に九条は破棄している。
それに大臣の数は本来１４人以下と憲法で定められているが、
実際は場合により１７人まで置くことが出来る。
今回は１５人である。

ヤマガタはこれを違憲では無いとし、
半ば強引に押し切る形となった。

これが第九条破棄の理由。
７５年前に既に仕組まれていたのか・・・

タカハシはヤマガタの後ろを歩いている。
彼は法務省の面々、具体的には副大臣、検事総長、
公安審査委員会委員長、公安調査庁長官と４人に挨拶を済ませていた。

しかし、ヤマガタはあと一人いるのだという。

「ヤマガタさん。」

反応はない。

「あと一人というのは？」

「ここにいる。」

その部屋の中には、
一人の男が座っていた。

「あなたは？」

「法務省顧問のオバタです。以後宜しく。」

―嫌な感じのする笑顔だった。

「あの・・・」

スズキはまだよく飲み込めていなかった。

「何です？」

「いや、ずっとここにいないといけないんですか？」

「そうです。では私は仕事に戻ります。」

ヨコミゾは扉を閉め、
それっきり来なかった。

「・・・。」

正直スズキは暇だった。
試しにベッドの数を数えてみた。　４６だった。

国立遺伝学研究所。

「タカハシさん。」

オバタと名乗った男は
口を開いた。

「早老症というのを知っていますか？」

「えぇ。」

「ウェルナー症候群、
ハッチンソン・ギルフォード・プロジェリア症候群、」

「それにロストモンド・トムソン症候群。」

「あとはコケイン症候群。
まぁダウン症候群なんかも入るときがありますね。」

オバタは窓から外を見ている。

「ウェルナー症候群。全世界で約１２００例報告されています。」

「そのうち８割が・・・」

「そう、日本人ですよ。」

ウェルナー症候群とは１９０４年、
ドイツの内科医オットー・ウェルナーにより、
アルプス地方居住の４人兄弟の症例が初めて臨床報告された病気である。

「早老症・・・もし、その逆が可能なら・・・」

「え？」

「不死とまではいかずとも、限りなく老いから遠ざかる。」

「・・・。」

「そういうの、素晴らしいですよねぇ。」

オバタは椅子を回転させ、
あの笑顔を向けた。

「どうですか？　”日本”は見えてきましたか？」

スズキにある一人の男が訪ねてきた。

「あなたがスズキさん？」

「・・・はい。」

男はベッドの横の椅子に腰掛けた。

「あなたがねぇ。　そうですか。」

「あの・・・あなたは？」

「私？」

男は物腰柔らかな初老の男性で、
今まで見たどのような人より紳士的だった。

「文部科学大臣、タケダです。」

法務大臣に文部科学大臣。
スズキは全く訳が分からなかった。

「ここは国立遺伝学研究所。静岡県三島市谷田という所にあります。」

静岡？自分はいつの間に
こんな所まで連れてこられたのだろう。
初めて恐怖を覚えた。

「あなたは国家の最高機密を見た。」

スズキは唾を飲んだ。

「だが今は、あなたが国家の最高機密です。」

スズキはやはり飲み込めなかった
今から何が始まるのか、最高機密とはなんなのか。

世界大戦。

大臣就任会見が終わり、帰ってきたタカハシは
かなり疲労が溜まっている様だった。

事務所のドアを開けると、
そのままこけた。

「先生ッ　大丈夫ですか？」

「んなワケあるかよ。見りゃ分かるだろ。」

言葉の割に、元気は無かった。

「で、何か分かりました？」

「全然。」

「じゃ収穫ゼロって事ですね？」

「それは・・・違うかもよ。」

タカハシはそう言い残すと
何故かさっさと奥に入ってしまった。

「・・・先生。タバコは置いていって下さいよ。」

「バレてたか。」

この頃、ユダヤ人と
パレスチナ人・アラブ諸国の対立は激化していた。

事の発端はかなり昔に遡るが、
イギリスの出したサイクス＝ピコ条約、フセイン＝マクマホン協定、
バルフォア宣言という互いに矛盾した取り決めのために
収拾がつかなくなったというのが適当かも知れない。

また同時期、ロシアと
ウクライナを除く周辺諸国との緊張が高まっていた。
アメリカは危機感を感じ、ＥＵ・日本との連携を強めようとしたが
両者とも明言するのを避けていた。

一歩間違えば、世界大戦が起きてもおかしくない。
そんな気運が高まっていた。

スズキは大学時代のことを思い出していた。
大学の時、特に仲が良かったのは
アキヤマという男だった。

アキヤマは学部こそ違うが
気の合う友人だった。

学生食堂でランチをひっくり返したスズキに
手をさしのべ、片付けを手伝ってくれたことから
二人はお互いに仲良くなった。

スズキと違い、アキヤマは
いわゆるエリートという奴だった。

教授には気に入られ、
大学を首席で卒業し、
国の機関で働くのだとアキヤマは言った。

スズキは大学で二回の留年をした後、
大学を辞めたのだった。

そんな対象的な二人が
久しぶりに会ったのはスズキが３０になる頃だった。

アキヤマをみたスズキは
少しバツの悪そうなカオをして見せた。

どうしたんだと心配するアキヤマから
スズキは無視する形で逃げようと思った。

その時アキヤマは
自分は今度はアメリカに行くんだと言った。

スズキはうつむいて、
がんばれよと小さく漏らし
そのまま立ち去ったのだった。

「今頃あいつ何やってるかなぁ。」

スズキは一人、
真っ白な部屋の中で
小さくため息を漏らした。

小部屋。

タカハシの事務所の前に、
一台の車が止まった。

車から降りてきた男は
事務所から出てきたヨシダに告げた。

「総理大臣のヤマガタだ。タカハシ君・・・いるかね？」

車は公用車では無かった。
見た感じ普通の車だったが、
中から外は見えなかった。

「ヤマガタさん、今日は一体何ですか。」

タカハシは
少し眠そうだった。

「昨日は眠れたか？」

「えぇ。短かったですがね。」

ヤマガタは他愛も無い話を続けた。
行き先を尋ねても無駄だった。

「さぁ。少しだけ目隠しをしてもらおう。」

タカハシはされるがままだったが、
このまま殺されるかも知れないと内心不安だった。

目隠しを外されたタカハシの目の前には
ドアが一つだけあった。

逆に言えば、ドアしかなかった。
ドアに続く廊下は一本のみで、後ろを振り返ると
おそらく今乗ってきたであろうエレベーターが見えた。

「ここは・・・？」

「これが日本の中枢だよタカハシ君。」

「日本の中枢？」

「内閣は英語でなんと言うかね。」

「キャビネット・・・ですか。」

「そうだ。キャビネットすなわち”小部屋”だ。」

ヤマガタはドアを開けた。

「ようこそ。”小部屋”へ。」

スズキは証言台に立っていた。
金のないスズキは国選弁護人しかつけることは出来なかったため、
裁判は驚くほどスムーズに進んだ。
まるで、わざと死刑にしようとしているかの様に。

スズキの証言の一切は
聞き入れてもらえなかった。

それで案の定、死刑が確定したのだった。

刑の確定から一ヶ月もしないうちに、
スズキの所に見知らぬ男がやってきた。
それから先は覚えていない。

気がつくと目の前に
男が一人いた。

「スズキさん　良かったですね。あなたは運が良い。」

何のことか分からなかった。

シャンデリア。

ロシア大統領ソーンツェフの命により、ロシア軍は
グルジア、カザフスタンの両国に進軍。首都を占拠した。

これにより、今まで中立を貫いてきたＥＵも
ＥＵ・アメリカ軍事共同声明を発表。
以後アメリカ側陣営を共同国と呼ぶようになる。

ロシアの意図は不明だが、
これが後に第三次世界大戦のきっかけになる
グルジア・カザフスタン侵攻だった。

中国では軍部を率いるチャン大将が
クーデタを起こし、政権を奪取。

軍事独裁政権下の中国とロシアは
中露相互協力宣言を発表。
このことから中露陣営のことを協力国と呼ぶようになる。

日本は尖閣諸島、樺太を放棄する事で
中立を貫いていたが、日米・日英同盟を理由に
共同国側で参戦する事になり、
沖縄、新普天間基地がアメリカの中国進撃の要とされた。

ヤマガタがドアを開けた。
するとそこは薄暗い部屋だった。

中は狭く、窓はないが
天井だけは異様に高く感じられた。

天井から吊り下がった黄金の蜘蛛の様なシャンデリアは
この部屋に不釣り合いなほど巨大だった。

そして何よりこの部屋が異様に感じられるのは、
この部屋にいる３０人近い人間だった。

さっきの廊下の続きにも見える
狭いこの部屋には、両側に６つの豪華な椅子があり、
１２人がそこに座っている。

さらにその１２人の後ろに
１人か２人ほど人が立っている。

そしてこの部屋の一番奥、タカハシの正面には
白髪で小柄な老人が座っていた。

タカハシは右の列の奥から２番目の椅子に

オバタが座っているのを見た。

「キミか。」

奥に座っている老人が言った。
タカハシはそのカオを見て驚愕した。

「その様子だと、自己紹介はいらんようだな。」

男は立ち上がっていった。

「名だけ言っておこう。ガモウだ。」

タカハシが驚いたのも無理はなかった。
７５年前の日本国憲法第九条破棄
死刑制度廃止を行ったのは、
当時の内閣総理大臣、ガモウ首相だった。
共民党８０年体制を築きあげた最初の人物である。

そのガモウが目の前にいる―

ガモウは座りながら
両手を左右に開き言い放った。

「これが・・・日本だよ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9267n/

ドリー。

2010年10月9日19時49分発行